

令和 5 年 4 月 21 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03282

研究課題名（和文）香港のイスラーム・ブームとムスリム社会の「周縁化」

研究課題名（英文）The Islam Boom in Hong Kong and Marginalization of Muslim Society

研究代表者

王 柯 (WANG, KE)

神戸大学・国際文化学研究科・名誉教授

研究者番号：80283852

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は香港の一部の華人市民がイスラームに改宗し、自ら社会の主流にある漢民族集団から社会周辺にあるイスラーム社会へ移動することを事例に、民主主義が後退しつつある社会において、相対的貧困の深刻化に伴い、社会の周辺に置かれた一般市民、とくに若者が現実の社会に嫌味がさし、心の救済を求めるようになったという社会心理の存在を突き止め、しかし、無力感、孤独感、不安感と劣等感を持つ社会的弱者と「（与えられた）自由の重荷」を感じる青年が「逃避」できる「聖なる空間」は、信仰の自由と言論の自由が保障されている政治体制のもとにしかあり得ないものであることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、人間はいかなる条件と社会的背景のもとで、みずからマジョリティである社会的地位を捨ててマイノリティになる道を選ぶようになる法則を、政治学・社会学・宗教学・心理学の側面から突き止めることである。

本研究の社会意義は、経済格差によって社会的周縁に置かれた人々のなかに、社会の激しい変動期において現実の社会から隔離されているという理想の「桃源郷」に逃避したい者が多く存在することを、可視的データを使って証明したことであり、そして、民主主義が後退し、独裁体制が確立すれば、現実の社会から離れ、とくに政治に巻き込まれたくない者を救済する桃源郷が、事実上存在しえないことを掲示したことである。

研究成果の概要（英文）：This research examines the case of some Chinese citizens in Hong Kong converting to Islam and voluntarily moving from the mainstream Han Chinese group to the Islamic society on the periphery of society. With the increasing relative poverty, the general public, especially young people, who are placed on the margins of society, find the real society disgusting and seek emotional relief. Freedom of religion and freedom of speech are guaranteed as a "sacred space" where socially vulnerable people who feel powerlessness, loneliness, anxiety and inferiority complex and young people who feel "the burden of (given) freedom" can "escape". It was made clear that it is impossible only under the current political system.

研究分野：中国近代思想史、民族主義と民族宗教問題

キーワード：香港 イスラーム 改宗者 相対的貧困 一国二制度 社会周縁 民主化運動の弾圧 自由からの逃走

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

香港のイスラーム・ブームとムスリム社会の「周縁化」

1. 研究開始当初の背景

2014年のUmbrella Revolution(雨傘革命)から科研申請時の2016年時点の「香港独立運動」まで、中国返還後の香港社会の行方はますます混迷を深めていた。それと同時に、世間にほとんど注目されていないが、実は香港でイスラーム・ブームと呼ぶべき現象が起こっている。香港政府の統計によれば、2013年末の香港ムスリム人口(Hong Kong's Muslim population)はすでに27万人以上に増大し(Paul O'Connor, Report on Current Researchers on Islam in Hong Kong, Localization of Islam in China, 香港中文大学人文学研究所、2015年)、香港住民総数(当時718万)の2.659%を占めるようになった。この人口比は現在中国国内の1.7%をはるかに超えている。ところで、もう一方では、中国に返還されてから、インド系ムスリムが次第に政府の公務員組織系統から排除されたことに加え、香港社会におけるムスリムの「周縁化」が進み(申請者の前香港税関官僚Najeem Khamに対するインタビュー)、しかしそれと同時に、香港社会の底辺にいる華人によるイスラーム改宗の現象が起こった(申請者は2013年9月22日に梁という香港華人(男性)の招待を受けて、香港愛群清真寺というモスクで金曜礼拝のあと、彼を含む6名の香港華人の改宗式に参列し、華人男性のイスラーム改宗者は年々増加しているという事実をそこで知ることになった)。華人男性のイスラームへの改宗は、中国本土だけではなく、比較的長い歴史を有する香港においても未曾有の現象であった。このようなことは、疑いなく当時の香港社会情勢と関係しているものであり、香港社会と政治体制が抱えている問題の本質を明らかにする格好の材料であった。しかし残念ながら、香港のイスラーム社会についての研究は本来少なく、同時代に進行中であるこの現象を人類学・社会学的側面から注目する研究は皆無であった。例えば、2013年9月に設立された香港中文大学の「イスラーム文化研究センター」が2015年12月3-4日に主催した国際シンポジウムChinese Muslim in Diaspora: Culture, Gender, Identity, and Religious Traditionsにおいて報告された22篇の論文の中で、香港ムスリムに触れたのは一篇だけだった。そのほか、Wai-yip Ho, *Islam and China's Hong Kong: Ethnic, Identity, Muslim Networks, and the New Silk Road*, London: Routledge, 2013は、香港におけるイスラーム・ブームとムスリムの「社会周縁化」の同時進行現象については、触れていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、香港におけるイスラーム・ブームとムスリムの「社会周縁化」が同時進行しているという現象が起こった原因とその社会的仕組みを構造的に解明し、よって香港社会と政治体制が抱えている問題の本質を明らかにすることであった。具体的に言えば、2001年のアメリカ同時多発テロ事件のあと、国際社会のイスラームに対する目はますます厳しくなっているなかで、なぜ一国二制度、つまり資本主義制度と社会主義制度の併存が謳歌される香港においてこのようなイスラーム・ブームが起こるのか。それは1997年の中国返還後の香港社会の社会構造・経済構造、政治構造と香港人の帰属意識の変動、とりわけ当時香港における経済格差の拡大、社会階層の分裂と対立、特に民主主義の後退と関連しているのかどうか。そして、イスラーム・ブームはなぜムスリムの「社会周縁化」と同時に起こり、進行するのか。この現象の文化的(広義的)意味と社会的仕組みを、構造的に解明することを通じて、政治学的に香港における「一国二制度」の本質、可能性と行方を解明するこ

とだけではなく、文化人類学と社会的に、社会変動期における大衆、とくに社会の周辺に置かれた若者と経済的に豊かではない人々の社会心理、つまりいかなる条件といかなる心理でいかなるパターンの行動をとるのかを論理的に分析することであった。

3. 研究の方法

本研究は現地におけるフィールドワーク調査と主に調査から得た資料に対する分析の二つの部分に分けられる。調査は三層構造で行われた。1、香港のイスラーム社会の一般状況についてである。各年度の Hong Kong Government, Hong Kong Yearbook に基づき、また現場における聞き取り調査を通じて、各年度の香港ムスリム人口、職業構成を調査し、その変動と変動の規則を整理、把握する；各モスクの運営体制、ウラマの出身と教育背景の特徴、「伊斯蘭包波濤記念小学校」と「伊斯蘭脫維善記念中学校」の運営状況、授業のカリキュラムと生徒の人数と出身国（香港へ移住した年）と家族の職業構成などである。2、各イスラーム団体及び彼らによる宣教活動の内容についてである。香港にはイスラーム連合会（「香港伊斯蘭聯会」）が直接運営しているイスラーム文化センターと香港イスラーム青年協會、中華回教博愛社などのイスラーム系社会団体が存在する。彼らが開設したホームページと発行した雑誌に掲載した文章、また非ムスリムの香港住民を対象に定期的に開催した公開講座の内容を調べることである。3、イスラームに改宗した香港の華人住民についての調査である。これは本研究がもっとも重要視している部分である。各年次における改宗者数だけではなく、調査対象に対するプライバシーの侵害が起こらないことに最大限の注意を払いながら、匿名の形で改宗者の職業、家庭と住居環境、教育レベル、改宗の社会的背景と思想的動機、改宗前後の家族及び社会反応の変化の有無、イスラームに関する知識と現在の宗教活動などを調査し、20 数名から回答をもらった。そして、香港のイスラーム社会団体と聖職者の協力を得て、一部の改宗者に対する直接インタビューも実現した。

しかし 2018 年度の調査（2019 年 3 月）が終わった直後、香港において民主化運動が始まり、民主化運動の鎮圧と国家安全法の導入・実施に伴い、香港の自由な学術研究環境が失われた。そしてパンデミックによる入国禁止が 2022 年末までに続き、四年連続で現地に入ることができなかった。2023 年 2 月にコロナ感染状況の好転で入国がはじめて許された台湾において、香港から移住してきた香港のウラマ、九龍モスク地域の元区議会議員、そして一般の香港市民を対象にフィールドワーク調査を実施し、香港のイスラーム社会とムスリムが置かれた現状と原因究明に努めた。2019 年度以降、本研究は基本的にネット上における資料の収集と現地調査で得たデータの分析に専念した。

1、香港における経済格差の拡大と香港におけるイスラーム改宗者の増加という二本の変動曲線の重複度から、心の救済を必要とする人を産出する「逃避のメカニズム」（エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』）を検討する。

2、イスラーム団体による宣教内容の特徴と一国二制度を巡ってますます混迷する香港政治体制の行方との比較を通じて、民主主義体制が崩壊しつつあった香港におけるイスラームの社会的位置づけを分析する。

3、改宗者のイスラーム理解、改宗後の宗教活動への参加、香港の民主化運動への関心と参加などに基づいて、イスラーム改宗を促す人々の「暗黙の心理」（D. ウェグナー、R. ヴァレカー『暗黙の心理』）を分析する。

4、改宗者の家庭環境・家族の宗教信仰・経済事情・社会的地位に基づいて、改宗者それぞれのパーソナリティに「共通する面」、つまり「社会性格」（『自由からの逃走』）にある「孤

独感・無力感」から改宗する動機を分析する。

5, 改宗者の年齢・教育環境・自己観などに基づいて、「近代人における自由の二面性」と「伝統的権威から解放された個人」の「(与えられた)自由の重荷」という視点から青年改宗者の心理を分析する。

4. 研究成果

現地におけるフィールドワーク調査によって以下のことが判明した。

1, 香港社会と当局によるイスラームに対する偏見があるほか、中国返還後の内地からの政治的バックグラウンドを持つ人の大量流入によって、香港ムスリムの相対的貧困と社会地位の低下が一層深刻化した。

2、各イスラーム団体及び彼らによる宣教活動の内容は、イスラームの文化・歴史・教義についての紹介以外、イスラームがテロリズムを許さないこと、イスラームは近代的科学をむしろ歓迎していること、イスラームは社会に敵対しないこと、イスラームは信者の自由を奪わないことなどについての説明にも力点を置いているという特徴があった。これは香港社会のイスラームに対する偏見を正し、イスラーム改宗者の増加につながった。

3, イスラームに改宗した香港の華人住民についての調査を通じて、改宗者が増えた理由が、改宗者の宗教意識にだけでなく、中国返還後の香港社会の社会構造・経済構造、そして政治構造の変動によってますます強まった社会に対する不信感、個人の将来に対する危機感に関係していることが分かった。

そして、香港における民主化運動の鎮圧と国家安全法の導入・実施に伴い、香港のイスラーム社会は新たな局面を迎えたことが分かった。

1, 民主化運動の失敗によって香港のムスリムたちはさらに「周縁化」された

2019年の民主化運動まで、若者を中心に香港の華人住民によるイスラームへの改宗は年々増えていた。その大きな理由は、社会的に自立しなければならない年齢層にとって、政治活動に巻き込まれることを極力避けてきた、ある種の聖域として敬遠されている香港のイスラーム社会は、桃源郷的存在と感じられたことである。しかし2019年10月の「九龍モスク事件」(繁華街にある香港最大のモスクは、警察のデモ隊鎮圧のための放水で青色の水を浴び汚された事件)によって、これまで敬遠されたイスラーム社会が大衆の視線に担ぎ出され、社会激動期における政治姿勢が問われた。しかし香港のイスラーム社会は政府との関係を維持するため厳しく追及しなかった。これは市民からの不信を深め、いっそう敬遠されるという結果を招いた。

2, 香港のイスラーム社会は中国政府による「宗教の中国化」の波に呑み込まれている

かつて華人男性の改宗者が増加していたもう一つの理由は、香港のイスラーム社会の努力でイスラーム=テロリズムという考えの払拭が功を奏したことだ。しかし、香港国家安全維持法が導入されてから、本来宗教に敵視的である中国政府はそのイスラームに対する不信感を隠さず、香港のイスラーム社会に対する関与をますます強め、様々な政治的イベントを利用して重ねて中国政府への服従の表明を求めた。しかし「愛国愛港」・「愛国愛教」という名の下で「イスラームの中国化」を求めることは、イスラームの本来の姿を歪曲しイメージを悪化させた。それに嫌気がさしたウラマや一般の信者は香港を脱出した。

3, 民主主義の後退に伴って香港のイスラーム社会はますます活気を失っている。

かつて宗教信仰の自由と言論の自由があった香港は中国大陸のムスリムと海外のイスラーム社会が交流する窓口の役割も果たし、香港伊斯蘭聯會・香港伊斯蘭青年協會・中華回教

博愛社などのイスラーム団体もムスリム社会を束ねることだけではなく、香港市民のイスラームに対する誤解を溶くため、様々な形で活発な宣教活動を行っていた。しかし香港国家安全維持法が導入されてから、中国政府による政治迫害を恐れて、形が残る宣教活動はすべて停止し、宗教行事の連絡以外、ホームページの更新もすべて 2020 年の時点で止まった。民主主義の後退に伴ってイスラーム社会が活気を失いつつあった。

ネット上における資料の収集と現地調査で得たデータに基づく分析した結果、以下の結論を得た。

1 , 香港における経済格差の拡大と香港におけるイスラーム改宗者の増加が同時に進行した。その変動曲線が高度に重複していることから、相対的貧困の深刻化は人々の現実の社会に対する嫌気をますます強め、心の救済を必要とする人を大量に生み出したことが分かり、改宗者が増える社会的原因でもあった。

2 , 政治体制の行方が混とんとし、民主主義体制が崩壊しつつあるなか、イスラーム団体による宣教活動はイスラームが信者の個性と自由を束縛しない人間性に満ちた宗教であるということに力点を置くという特徴があった。しかし内外的認識のギャップによって、香港のイスラーム社会は、外部から干渉されずらく、現実社会から一定の距離と独立性を保つ聖なる空間となり、社会的孤独感と無力感を持つ人々によってイスラームが心を休める桃源郷のような空間に見えた。

3 , 香港の華人住民によるイスラーム改宗の増加期と民主化運動の高揚期は高度に重なり、そして改宗者のイスラーム教義への理解度、改宗後の宗教活動への参加度は意外に低い。このような事実から、彼らの改宗はイスラームの教義に惹かれたというより、「争教不爭国」という政治から逃げる伝統があるイスラームへの改宗を通じて、自分を香港の現実社会から隔離させるガード・ケーブルを作るという「暗黙の心理」があると分かった。

4 , 資本主義経済システムが確立されていた香港では、個人の経済状況は人間の劣等感にリンクされるものである。イスラーム改宗者は裕福ではない家庭環境と家族の経済状況・社会的位置づけは相対的に低いことから、「個人の孤独と無力」を感じざるを得ないという「共通する面」を持ち、大きな責任感に対する危惧から「逃避」と「自我」を失いたいという「社会性格」が形成されたことが分かった。

5 , 大半の改宗者は、普通の義務教育しか受けていない 10 - 20 代の青年であり、家族との「第一次的絆」から脱出して独立と自由を手にしたが、それとともに無力感、孤独感、不安感と劣等感が一層強まり、「(与えられた)自由の重荷」を感じるようになったことが分かる。まさにこの意味で、若者を中心とする香港の中国系住民によるイスラーム改宗は、与えられた自由から逃れて、「新たな依存と従属を求める」逃避行であり、エーリッヒ・フロムの言う「自由からの逃走」に当たる。

6 , 家庭環境と家族の経済状況・社会的位置づけは相対的に低く、無力感、孤独感、不安感と劣等感を持つ社会的弱者と「第一次的絆」から脱出して「(与えられた)自由の重荷」を感じる青年に「逃避」する「聖なる空間」は、信仰の自由と言論の自由が保障された社会においてこそありうるものである。

なお、本研究の成果を、共著(1冊)、論文(合計12篇、うち香港のネットメディア「端伝媒」の「深度」評論にて5)、その他(8篇、論評、書評)を通じて発表し、公開講演会を一回開催した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 王 柯	4. 巻 57号
2. 論文標題 「『自由からの逃走』? 香港住民によるイスラーム改宗の社会心理」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『国際文化学研究』	6. 最初と最後の頁 85-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 52
2. 論文標題 「周縁を脱出する作意 中国南方ムスリムの『宗族化』と『官』の語り」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 神戸大学国際文化学研究科『国際文化学研究』	6. 最初と最後の頁 35-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 128
2. 論文標題 「他者の発見と「中華民族論」の誕生」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『研究 中国』	6. 最初と最後の頁 14-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 44号
2. 論文標題 「倫理コミットメントと現代中国研究」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国現代研究会『現代中国研究』	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 328
2. 論文標題 「香港二百万人デモの真相」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藤原書店『機』	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 675
2. 論文標題 「『畏敬』の争奪 現代中国における政治と宗教」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本国際問題研究所『国際問題』	6. 最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 1
2. 論文標題 「『辺縁人』的歴史与歴史書写——兩個民族狭縫中的日本華人」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 既南大學『海外華人研究』	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 333
2. 論文標題 「普遍的価値を尊ばない『人類運命共同体』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藤原書店『機』	6. 最初と最後の頁 17 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 332
2. 論文標題 「党国体制と『人民』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藤原書店『機』	6. 最初と最後の頁 20 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 331
2. 論文標題 「『闘争』の復活」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藤原書店『機』	6. 最初と最後の頁 17 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 330
2. 論文標題 「習近平が目指す『中国』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 藤原書店『機』	6. 最初と最後の頁 18 - 18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 王柯	4. 巻 161
2. 論文標題 書評「当歴史成為『歴史』」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 香港中文大学『二十一世紀』	6. 最初と最後の頁 132 - 141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 王柯	4. 発行年 2020年
2. 出版社 上海人民出版社	5. 総ページ数 352
3. 書名 『從“天下”国家到民族国家：歷史中国的認知与实践』	

1. 著者名 王柯・王力雄	4. 発行年 2022年
2. 出版社 藤原書店	5. 総ページ数 241
3. 書名 『ハイテク専制国家 中国』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「極端的民族主義，一定是与世界為敵」香港，端傳媒、深度評論，2017年11月14日 https://theinitium.com/article/20171114-opinion-wangke-nationalism/ 「從『天命』到『革命』 中国千古流傳的以民為本思想」 「ネットメディア・端傳媒」（香港）の「深度」評論、2018年6月4日，https://theinitium.com/article/20180604-opinion-wongke-change-of-mandate/ 「發見敵人&#8212;&#8212;血緣論的中華民族思想，何以在近代站穩&#33139;跟」 「ネットメディア・端傳媒」（香港）の「深度」評論，2019年1月17日， https://theinitium.com/article/20190117-opinion-wangke-china-nationalism/ 「借「民族」之名 從「被選沢的精神創傷」到永遠的「最危險」」 「ネットメディア・端傳媒」（香港）の「深度」評論，2019年5月4日， https://theinitium.com/article/20190504-opinion-wangke-4thmay-nation-nationalism/ 「IT技術・インタネットと政治独裁」、王力雄著『セレモニー』推薦の言葉、藤原書店、2019年4月、1 - 6頁。 「反動」動員&#8212;&#8212;Nation State 如何在專政政治下被異化， 「ネットメディア・端傳媒」（香港）「深度」評論，2020.5.14; https://theinitium.com/article/20200514-opinion-wangke-nation-state/ 「我們需要再來一次“民主主義”的啓蒙」The Financial Times(FT)、2022/09/13、https://www.ftchinese.com/story/001097256?adchannelID=&full=y&archive</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------